

---

あの時、体験したことで、自分の世界が広がりました。ぜひ参加してみてください。参加することでしか経験できない事はとても多いです。将来どのような道に進むにしても役に立つ時が必ずきます。ボランティアに行ってみよう、とまず思えた事を誇りに思って楽しんで活動してみてください！

---

忘れてたけれど、思い出しました。素敵な思い出になりますように。

---

(未記入 7 件)

## 6. 10名のストーリー

アンケート回答者のうち、10名からは、オンライン・インタビューという形で、さらに詳しい話をお聞きすることができました。以下では、それぞれ「夏ボラ体験」をしつたきっかけや体験時に行った活動、そこで考えたことや現在の状況をまとめています。参加年度が早い方々から、見ていきます。

### M.T. さん

### 2003 年度・NPO 法人くもりのち晴れ

高校 3 年生のとき、放課後に先生から紹介されたことをきっかけに参加。衛生看護科の高校だったので、クラス全員が何らかのボランティアをするような形になっていて、そういった機会があると順番にまわってくる感じだった。夏祭りが面白そうだったので、友達と 2 人で参加した。夏祭りでよさこいを踊る練習をした。体験先はウェルカムな感じで、ボランティアというより、ジュースを飲んで帰ってくるような感じで楽しかった。自分が暮らしている地域に、こういう場所があることを知るだけでも、大きな発見だった。体験先が歩いていける場所だったこともあり、体験終了後も、事業所に寄って、将来のことや子どもたちの状態について話をしたりした。現在は、2児の保育をしながら、看護師をしている。

### D.S. さん

### 2010 年度・NPO 法人ホームひなたぼっこ

### 2011 年度・NPO 法人せんだいファミリーサポート・ネットワーク

### 2012 年度・NPO 法人萌友

高校 1 年生のとき、学校の廊下で見たチラシをきっかけに参加。1 回目の体験時、充実感があって楽しかったため、他のもやりたい、3 回違うところでやりたいと思っ

たという。「萌友」の印象が最も強く残っており、「ホームレス」という言葉の印象が大きく変わった経験だった。体験後、友達に「見方を変えた方がいいよ」と話したほどだった。夏ボラの体験は「人生の分岐点」となった。大学進学後にボランティアサークルに入り、その中で知的障害を持つ子どもたちに接する活動をしたことから、特別支援教育に関心を持つようになり、現在は神奈川県の養護学校にて教諭として働いている。

### S.A.さん

#### 2010年・特定非営利活動法人 オープンハート・あったか 2011年度・NPO 法人どんぐりの家 2012年・NPO 法人どんぐりの家

高校でチラシをもらったことをきっかけに参加。通っていた高校は、ボランティア活動時間数に応じて単位が出ていたこともあって、同級生も積極的に参加していた。高校1年生のときに震災を経験しているので、それも手伝っていたと思う。高1のときは感覚ミュージアムで体験し、その後2回は「どんぐりの家」で介護現場の活動をした。自閉症の子どもが、ジャイアント馬場のお葬式の動画を見せてくれたことを、今でもはっきりと覚えている。去年、たまたま興味のある国際交流のセミナーの会場が「どんぐりの家」で、訪問するチャンスがあった。代表の方など、覚えていてくれて、うれしかった。ボランティアは、自分の中に根付いていると思う。教育について大学で学び、企業での経験を積んだ後、現在は放課後児童クラブで働いている。

### K.M.さん

#### 2015年度・宮城善意通訳者の会

学校で体験先のリストをもらったことをきっかけに参加。当時は航空業界での就職を目指しており、それにつながる体験先として、通訳ボランティアを選んだ。一緒に参加する同級生がおらず、躊躇していたが、両親が背中を教えてくれたという。別の高校生と2人組で仙台駅構内を歩き、中国やネパール、タイなど、様々な国の人々と話した。皆、スマホやアプリを持っているため、困っている様子ではなかったけれども、待っているだけでは何もできないと思い、積極的に声をかけた。大変だったことはなく、楽しかった。当時の資料をきれいに保存しており、初めてのボランティア体験の記念として「修了証」も取ってある。現在は、社会人一年生とし

てホテル業界で働いている。

**H.M. さん**

**2015 年度・子育て応援団ひよこ  
2017 年度・子育て応援団ひよこ**

同じような時期に、学校の壁に貼ってあった「ボランティア講座」のポスターと、保健室で夏ボラの掲示を見たことをきっかけに参加。講座を先に受けたことから、夏ボラではそれを実践する場になった。児童館のようなところで、子どもたちが危なくないように見守ったり、宿題を手伝ったりした。最初は、自分も子どもたちも、お互い慣れなくて大変だったが、子どもたちが今でも使っているあだ名をつけてくれた。冬になってから、再び体験先に遊びに行ったところ、子どもたちも館長さんも覚えていてくれて、うれしかった。そこから再びボランティアをすることになり、大学1年生のときまで続けた。現在は、経営学部で学ぶ大学3年生。

**A.S. さん**

**2016 年度・NPO 法人アマニ・ヤ・アフリカ  
2017 年度・NPO 法人アマニ・ヤ・アフリカ**

学校のポスターを見たことをきっかけに参加。中学生のころから関心があったアフリカに関わる団体を選んだ。実践だけでなく、国際協力に関するレクチャーも受けることができた。オンラインで、ケニアの人と話す機会も設けてくれた。支援はいいことだと思っていたけれど、形によっては、現地の人の仕事を奪うことにもなることを知り、衝撃を受けた。2回目に参加するときには、自分なりに質問リストを作って、持っていく、さらに詳しく教えてもらった。この夏ボラでの体験がきっかけで、もっと自分でも研究したいと思い、進学先を選んだ。夏ボラがなかったら、何を関心を持って、大学に選んでいたんだろうと思うぐらい、大きな体験だった。現在は、国際関係を学ぶ大学2年生。

**M.S. さん**

**2016 年度・NPO 法人仙台夜まわりグループ**

高2のとき、先生から紹介されたことをきっかけに参加。チラシをもらって、すぐにやろうと思った。ホームレスの想像ができなかつたので、実際にやってみたらどうかと思った。炊き出しに参加して、想像以上に人数が多いことが印象的だった。ホームレスの人と、その日にあったことや、高校生活のことなど、普通の雑談をした。普段お話しすることができない人々と接して、偏見が少なくなったと思う。支援活動をしている人も含め、普段の生活では関わることのない人と交流する場所を経験で

きたことが、大きな発見だった。視野が広がって、世界観が変わったと思う。今 の生活の中で、NPO やボランティアと関わることはあまりないが、コロナの後、 NHK のニュースで体験先が取り上げられていた際には、すぐ目についた。現在は、 服飾と建築を専攻する大学 3 年生。

#### M.T. さん

#### 2015 年度・NPO 法人 ForYou にこにこの家

高校 1 年生のとき、図書館で見た資料とクラスでの掲示をきっかけに参加。面白 そうだと思った。以前から仙台市のジュニアリーダーとして活動していたので、ボ ランティアの経験はあった。最初、体験先にこどもたちの活動を選ぼうと思ったが、 NPO 法人がやっているお年寄りの施設も面白そうだと思った。初めてお年寄りに 接した経験だったが、一緒に竹で流しそうめんやカラオケをした。スタッフの人が とても明るく、お年寄りのことを第一に考えて接している姿や利用者さんの笑顔を 見て、NPO が地域の人たちのために活動していることが、とても良く分かった。現 在は、就学前教育について学ぶ大学 3 年生。

#### N.A. さん

#### 2017 年度・NPO 法人仙台夜まわりグループ

高校 2 年生のとき、授業の後に先生が紹介してくれたことをきっかけに参加。興味本位から、漫画などでしか知らなかったホームレス支援を体験先に選んだ。服装 が汚れているなど、良くないイメージを持っていたが、ホームレスの人も、体験先 のスタッフの人も、皆楽しそうにしていて、自分も楽しい時間だった。偏見や差別 について考えるきっかけとなった。家がなくても、一人の人だった。家がないこと を「ああだ、こうだ」いうのは違うと考えるようになった。社会人になってから、 ボランティア活動をすることは難しいが、ホームレスの人々が台風やコロナの影響 を受けていないか、気になっている。現在は、社会人 2 年目の自衛官。

#### R. H. さん

#### 2017 年度・NPO 法人仙台夜まわりグループ

高校 1 年生のとき、せっかくの夏休みに、やったことがなかったボランティアに チャレンジしてみようと思い、参加。想像もつかないホームレス支援の体験先を選 んだ。遠い世界だと感じていたので、ホームレスの人々が本当に存在しているのだ と知って、びっくりした。2 年後、高 3 のときに、人が集まるコミュニティを求めて、再び体験先でボランティアをした。体験先の人も覚えていてくれて、うれしかった。ホームレスの人々といろいろな話をすことができた。仙台駅前の見慣れた

光景の中で、いつもとは違う炊き出しが行われていることに、自分は今まで何を見てきたんだろうと思った。大学入学し、ボランティアに関する授業があったが、やってみたことのある立場としては、紙の上の話だなという印象を持った。現在は、航空宇宙を学ぶ大学1年生。

## 7. インタビューに見る「夏ボラ体験」の良いところ

インタビューでは、「夏ボラ体験」のどのような側面が良いと感じたかについても、詳しくお伺いしました。そこから、3点が浮かび上がってきました。

第一に、高校の外と接触する機会になるという点です。学校の外に目を向け、視野を広げられたことが分かります。

- 「同窓会のために、高校の名簿を借りにいったこともあるが、外部の人間から子どもたちを守る環境にあると感じた。外の人とつながる機会がない。囲い込まれていて、まわりと交流する機会がもっとあってもよいのではないかと思う。」
- 「体験してみて、学校と違う世界に出会うことができた。」

第二に、「夏ボラ体験」後に役立つ経験ができるという点が挙げられました。

- 「いきなり一人でボランティアに飛び込むのは難しいので、仲介してもらえるのはありがたい。他のところにも、その後行きやすくなる。」
- 「進学する際、奨学金のための面接があった。集団面接で、自分から手を上げてアピールしなければいけなかった。夏ボラの経験は、そういうときの自信にもなった。」
- 「高校生が好きなことを活動できたらと思う。後々、経験が役立っていく。」

第三に、期間の短さが良さとして挙げられました。これまでの「夏ボラ体験」は、夏休み期間中のわずか3日間のプログラムとなっており、長期間に渡るボランティア体験から得られる事柄とは異なる性質を持っていますが、それこそが高校生の状況に合っているという指摘です。

- 「体験というのが良いと思う。長期間だとやめたくなることもあるけど、短

期間の体験というのが高校生にとっては良い。」

## 8. 改善点の提案

インタビューでは、夏ボラ体験が「もっとこうだったらしいのに」と思うことについても、お尋ねしました。そこから、3つの改善ポイントが浮かび上がってきました。

### ①興味がない高校生に情報を届ける必要性

今回のアンケートやインタビューに協力してくださった体験者の皆さんには、ボランティアに一定程度関心を持っている方々です。彼・彼女のように、『夏ボラ体験』に積極的に参加したいと考える高校生がいる一方、ボランティアに関心がない高校生や参加しづらいと考えている高校生も多く存在します。今後改善できる点として、そうした興味のない高校生に、『夏ボラ体験』の参加機会について情報を届けることの必要性が指摘されました。

- 「自分の同級生は、夏ボラに活発に参加しているという印象はない。同じ時に、参加している人がいたとしても、少数だったと思う。興味を持っていない人が多かった。」
- 「興味ない人たちにどう振り向いてもらうのかが難しいかもしれない。自分が夏ボラに参加するとき、興味ないたちは、ポスターをみなかったと思う。ボランティアに偏見を持っている人たちもいる。興味を持っている人と、持っていない人は、半々ぐらい。良く思わない人たちもいる。」
- 「ボランティアに参加しづらいと感じている若い子、興味ない子たちもいる。手に取りづらいと思う。」
- 「普通に生活していると、こういう情報を知る機会がない。」

SNS を活用した情報発信も、効果的な対策として提案がありました。

- 「SNS（Twitter やインスタ）で発信してみてはどうか。」
- 「ポスターを見ない人たちには、SNS でアピールしたりすると良いかもしれない。」
- 「例えば、高校生にとって、スマホは必需品。LINE アカウントを活用する

とか。メディアの使い方とか。SNS の見方とか、使い方とか、ディスカッションできたら良いと思う。」

そのほかには、グループで参加する方がやりやすいと感じる高校生もいることを踏まえ、個人ではなくグループでの応募を可とする提案や、年代を問わない「ボランティアサークル」などがあれば、高校生の興味を引けるのではないかという提案もありました。

## ②事前学習会の充実

ボランティア体験に出向く前に行われる「事前学習会」は、概ね肯定的に捉えられていることが明らかとなりました。体験先に出向く前に、予め情報を得られることが、安心につながっているようです。

- 「事前学習会で、NPO の担当の人が「こういうお手伝いをしてください」と説明してくれた。分かりやすかった。」
- 「事前学習会は、参加者が多いなあという印象。グループごとに分かれて、詳しい説明を受けた。参加する前に情報を得られたので、不安は多くなかつた。」
- 「最初のミーティングの時に、担当の人と会ったのが良かった。いきなり会つたらもっと緊張してしまうけれども、最初にこういう人がいるというのが分かったから、不安がなくなった。そういう打ち合わせはぜひやってほしい。施設のえらい人だったような気がする。」
- 「事前学習会は、割と詳しく話をしてもらえたので、初めて参加する人でも分かりやすいと思った。内容は細かく覚えていないが、ボランティア保険は必ず入るという話は覚えている。」
- 「事前学習会では、他の団体のことも知って、そっちも楽しそうだなと思ったりした。」
- 「事前学習会では、新聞の人から見やすい文章の書き方を教えてもらった。その後、高校の他の授業のレポートを作るときにも、参考にした。」

事前学習会で伝える内容として、様々な提案がありました。「夏ボラ体験」を経

験した先輩や他の高校の参加者など、タテとヨコのつながりをもっと作るという点は、これまでの事前学習会をさらに充実させられる、重要な提案です。

- 「何でこの事業をやるのか、何でボランティアするのかという説明も、もっとあつたら良いと思う。」
- 「お金にならないことをなぜするのかを理解してもらうことが重要。お金は重要だけど、バイトじゃできないことがある。」
- 「団体ごとの説明のときには、もっとしっかり説明があつてもいいかなと思う。やってみなきゃわからないというところはあるけれども、活動がイメージしやすいと良いと思う。例えば、ボランティアの活動の写真を並べるとか。やってみたいと集まってくると思う。」
- 「夏ボラに参加する際は、先輩の話を聞けたら良いなと思う。大学に進学したり、卒業して1、2年が経過した先輩が良い。」
- 「事前学習会のときなどに、参加者同士がもっと打ち解けられるアイスブレイクがあつても良いかもしれない。体験当日とかも、皆緊張していて、まったくしゃべれない。他の学校の人とかとお話できるチャンス。年が近くて、ボランティアに興味のある人たちと、情報交換ができたらよいのではないか。」

### ③参加形態の充実

複数の観点から、「夏ボラ体験」に参加する形態についての提案がありました。まず、開催時期や複数のNPOで体験できるようにすること、また一回にボランティア体験を行う人数を増やすと案がありました。

- 「高校生の人数を増やしてみてもよいと思う。自分が参加したときは、4人だけだった。10人ぐらいでも良いかも。」
- 「高校生は今まで時間があるから、冬にもやってほしい。」
- 「せっかくなので、1ヶ所だけではなくて、2、3ヶ所できてもよいかもしれない。」

次に、NPOでのボランティア体験の内容について、よりアイデアを出したいという希望が見られました。NPO側が準備した活動だけでなく、先に情報を得た上で、

自分たちに何ができるのかを考えさせてほしいという提案です。

- 「体験当日、もっと活躍させてくれても良いかなと思う。」
- 「『このあと、これやって』みたいな指示を受けていた気がする。どういうことができるのか、先に聞いてほしかった。今やるとしたら、お年寄りと子どもたちが交流することを企画したい。今は子どもたちと接しているが、お年寄りと接する機会は年一回とかなので、もっとあっても良いと思う。一緒に料理をするとか、遊んだりとか、できたらいいなと思う。」

また、体験後をふりかえる作業についても、提案がありました。

- 「報告会があったら、楽しいかもしれない。」
- 「体験の後、感想文を書いた。紙で提出する必要があったと思うが、自分はそのフォームをなくしてしまったので、提出期限から遅れてメールで提出した。最初からメールで提出で良いのではないかと思う。」

### III. 受け入れ NPO への調査

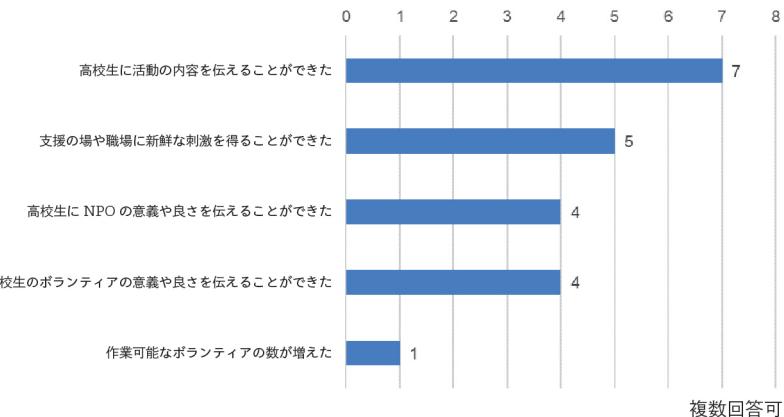
過去 17 年の間、高校生をボランティアとして受け入れてきた団体は、54 にのぼります。参加者を受け入れてきた NPO は、「夏ボラ体験」をどのようなプログラムとして捉えているのでしょうか。8 団体から寄せられた回答を見ていきます。

#### 1. 高校生を受け入れて良かったこと

8 団体中、実に 7 団体が、高校生に自分たちの団体の活動内容を伝えることができたと感じていることが分かりました。3 日間という短い体験期間ではありますが、情報を伝えられる機会として捉えられているようです。高校生に NPO の意義や良さを伝えることが出来た、あるいはボランティアの意義や良さを伝えることができたと感じている団体も、それぞれ 4 団体確認されました。

高校生が体験に来ることは、NPO にとっても、新たな風を感じる機会となっているようです。支援の場や活動の場に、新鮮な刺激が得られたという団体も 5 つありました。

一方、作業可能なボランティアの数が増えたことを挙げた団体は、わずか 1 つでした。「夏ボラ体験」に参加する NPO の多くは、高校生を単純な労働力として捉えているわけではないということがよく分かります。



#### 2. 「夏ボラ」後の高校生との交流

NPO は、「夏ボラ体験」で受け入れた高校生と、その後交流を持っているのでしょうか。アンケートからは、交流を持っている団体が複数見られました。8 団体中、

3団体が同じ生徒をボランティアとして再び受け入れています。1団体では、イベントに参加してくれたことが報告されました。

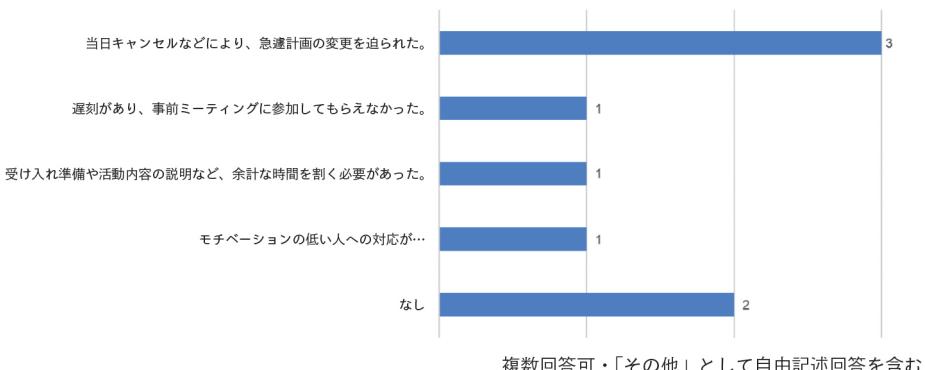
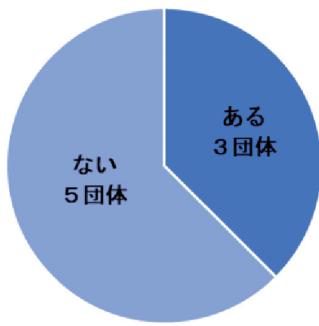
「夏ボラ」では、プログラムとしてこうした継続的なつながりを持つことを積極的にすすめているわけではありません。にもかかわらず、夏休み期間中のわずか3日間の接触でも、「夏ボラ体験」を通じて、NPOと地域に住む高校生とのつながりが生まれていることは、とてもうれしいことです。それだけ、NPOの活動の重要性が高校生に伝わっており、また高校生にとっても、NPOがやりがいや楽しさを感じる場になっていることが分かります。

### 3. 高校生を受け入れて困ったこと

「夏ボラ体験」の高校生を受け入れることは、NPOにとって負担になることもあります。アンケートでは、こうした困った事柄についても伺いました。

特にないと感じている団体も2つある一方、体調不良等によって当日に体験がキャンセルされることで、急遽計画の変更を迫られたという団体が3団体、また遅刻により事前ミーティングに参加してもらえないかったという団体も1つ確認されました。こうした点は、当日にならないと状況が確定しない感染症対策をしながら実施していくく次年度以降、特に考慮を要する点として考えられます。

受け入れ準備や活動内容の説明に、余計な時間を割く必要があったと感じた団体も1団体ありました。また、参加する高校生ボランティアのモチベーションの低さを指摘した団体も1団体ありました。

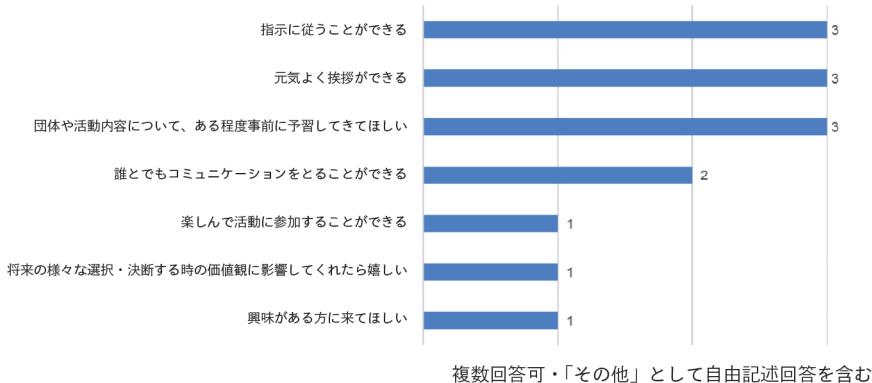


## 4. 高校生に期待すること

高校生に期待することとして、体験当日のふるまいを指摘する声が聞かれました。指示に従うことができる、元気よく挨拶ができる、誰とでもコミュニケーションをとることができる、楽しんで活動することができることが、重視されています。

また、高校生のモチベーションも、「夏ボラ体験」参加者を受け入れる上で、期待されています。団体や活動内容について、ある程度事前に予習してきてほしいという団体や、興味のある高校生に来てほしいという声が聞かれました。

さらに1団体からは、将来の選択や決断に影響する体験をしてほしいという期待が寄せられました。受け入れNPOが、自身の団体や活動、あるいは地域のためだけではなく、ボランティア体験を行う高校生自身のためになる経験をしてほしいと願っていることが分かります。

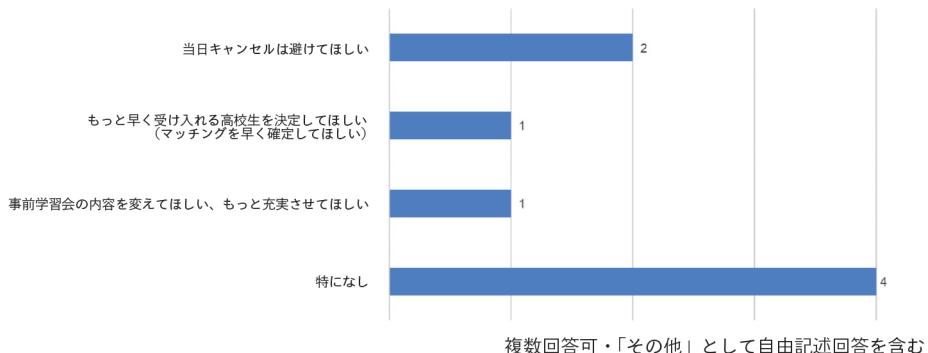


## 5. 改善点の提案

改善を要する点はないという回答する団体が4つ確認されました。NPOにとつて、これまでのプログラム運営方法が問題なく受け入れられていることがわかります。一方、当日のキャンセルを避けてほしい、マッチングを早く確定してほしい、事前学習会の内容を変えてほしい・もっと充実させてほしいという声も聞かれました。

また、「マッチング後の顔合わせだけではなく、事前に直接受け入れ先の団体と体験先に選びたいと思っている高校生、体験先を選ぶのに迷っている高校生と質疑応答の時間があればよいと思う。団体紹介の文だけで選んでいる結果、思っ

ていたのと違うと思う高校生も多いのではないかと思う。」という意見も寄せられました。



## IV. 送り出し高校への調査

「夏ボラ体験」は、県内の高校を通じて募集を行うプログラムです。過去17年間、生徒をボランティア体験に送り出してくださった高校のうち、2020年度も存続している83校にアンケートへの協力を依頼しました。コロナ禍での授業や受験に対応される中、8校から回答をいただきました。

また担当教諭1名には、オンライン・インタビューで詳しくお話を聞くことができました。6年に渡って、生徒を「夏ボラ体験」に送り込んで来られ、学内でもボランティアグループを運営されている先生です。

ここでは、高校での「夏ボラ体験」の周知方法、先生の視点から見た生徒が「夏ボラ体験」から得ているもの、生徒を送り出す上で困ったこと、現役高校生のボランティアへの関心と参加機会、改善案の提案を見ていきます。

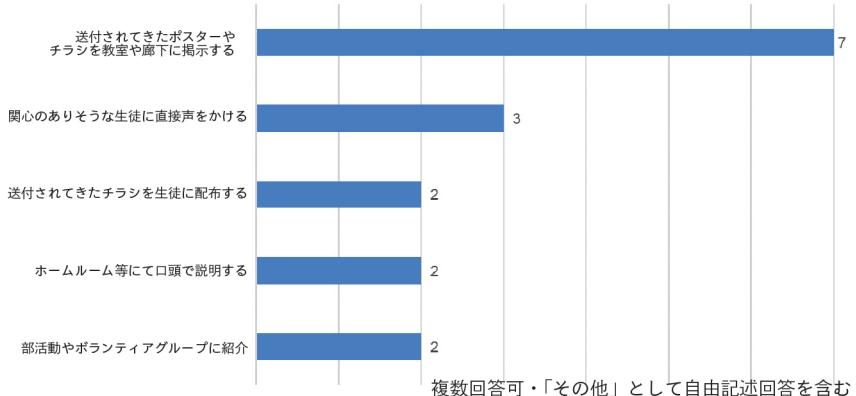
### 1. 「夏ボラ体験」の周知方法

夏休みに地域でボランティア活動を体験できるという情報は、高校生にどのように伝えられているのでしょうか。

最も多かったのは、送付されてきたポスターやチラシを教室や廊下に掲示するという方法で、8校中7校がこの周知方法を回答しました。また3校では、関心のありそうな生徒に直接声をかけていることがわかりました。この方法は、体験者へのアンケートからも、有効な方法として指摘されたものです。

送付されたチラシを生徒に配布している高校は2校、ホームルーム等で口頭で説明している学校が2校、部活動や校内のボランティアグループに紹介している高校が2校確認されました。

インタビューで詳しくお話を伺った先生の高校では、ボランティアのグループがあり、2ヶ月に1回、そこでボランティア経験をふりかえる時間を設けているそうです。同じ高校の生徒が何をやっているのかが分かるだけでなく、自分がやってみてよかったですのは、自ずとまわりに広げていくことにもなるため、ボランティアの機会が周知される時間にもなっているということでした。特に、この高校を卒業した先輩が行っている活動には、高い関心を持つ生徒が多いそうです。高校の友達、先輩、後輩も、「夏ボラ体験」を紹介する存在として、重要な役割を果たし得ることが浮かび上がります。



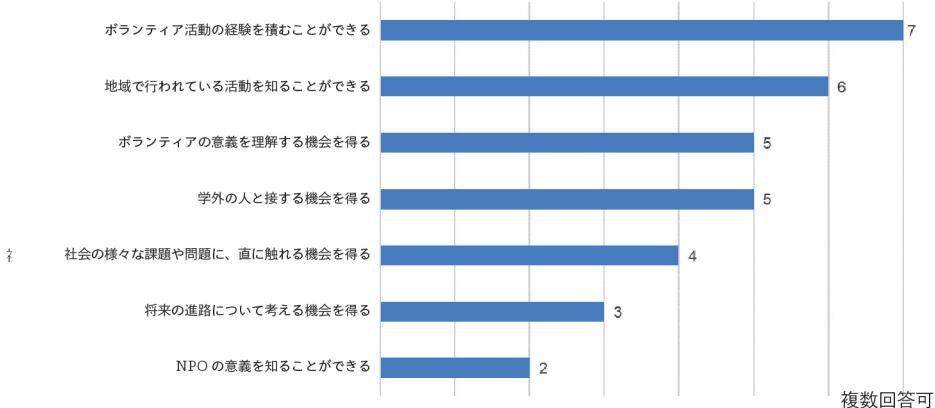
## 2. 「夏ボラ」から高校生が得ていること

高校の先生は、生徒が「夏ボラ体験」に参加することで、どのようなことを得ていると捉えているのでしょうか。

回答が寄せられた8校中、7校からは「ボランティア活動の経験を積むことができる」という点が、5校からは「ボランティアの意義を理解する機会を得る」ことが挙げられました。「NPOの意義を知ることができる」と回答した高校が2校にとどまったことから、「夏ボラ体験」が、NPOよりもボランティアに軸足を置いたプログラムとして捉えられていることが浮かび上がります。

6校は、「夏ボラ体験」を通して、高校生が「地域で行われている活動について知ることができる」点を挙げました。5校は「学外の人と接する機会を得る」こと、4校は「社会の様々な課題や問題に、じかに触れる機会を得ること」を挙げました。学校の外に目を向ける機会として「夏ボラ体験」が捉えられているようです。

3校からは、「将来の進路について考える機会を得る」という回答が寄せられました。



### 3. 「夏ボラ」に生徒を送り出す上で困ったこと

アンケートでは、高校から生徒を「夏ボラ体験」に送り出す上で困ったことについてもお伺いしました。

3校からは、参加する高校生側の都合との兼ね合いが指摘されました。インタビューでも、部活とボランティアグループの両方をやっている生徒が多く、やりくりの難しさが話題にのぼりました。さらに、「生徒の居住地から体験場所への交通手段がない場合、平日では家庭の協力が得られないことが多い。」ということです。また、夏休み期間中のプログラムということもあります、「部活動との兼ね合い」も指摘されました。1校からは、「関心のある生徒がいない」という意見が寄せられました。

さらに、参加申込手続きについて、2校から声があがりました。「各生徒が希望する体験先のリストの送付など、連絡に手間と時間がかかる」「希望が重なり調整が難しいことがあった」ということです。

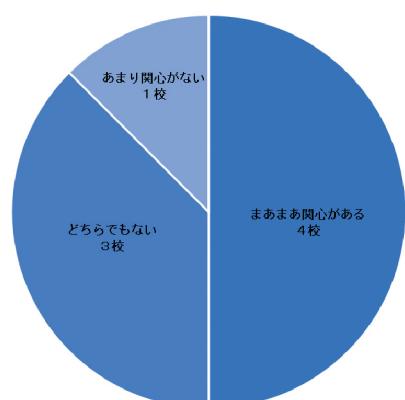
その他として、「コロナの状況でということが心配」という意見が1校、「特になし」が2校ありました。

### 4. 現役高校生のボランティアへの関心と体験機会

過去の「夏ボラ体験」参加者からは、ボランティアに対して関心のない高校生が一定数いることが指摘されていました。先生の視点から、現役高校生の関心レベルはどのように捉えられているのでしょうか。5段階で尋ねたところ、「高い関心がある」「まったく関心がない」と回答した高校はなく、その間の3つのレベルに分散した結果となりました。回答のあった8校中、半分の4校が「まあまあ関心がある」と回答していることから、現役の高校生は、ボランティアにある程度の関心が持っていると読み取ることができそうです。

インタビューで詳しくお話を伺った先生の高校は、東日本大震災の被災地域にあります。現在の高校生は、直接的な被災経験の記憶があまりない世代になってきているため、5～6年前に比べると、ボランティアという形で復興などの活動に携わることへの関心は低くなっていると感じられているそうです。

「夏ボラ体験」以外に、高校生がボランティア活動を体験する機会を設けているかどうか



をお聞きすると、回答を寄せてくださった全8校から「ある」という回答がありました。 インタビューを行った先生の高校でも、毎年20件ほど、学外からボランティアをする機会についての案内が入ってくるそうです。県内で学ぶ高校生には、「夏ボラ体験」をはじめ、様々な形でボランティア活動を行うチャンスがあることが分かります。

- ・一部の生徒であるが、総合的探究の時間に地域行事に参加する者がいる
- ・募金活動
- ・市の社協の方々の紹介など、20件近くある
- ・とっておきの音楽祭
- ・ツールド東北
- ・地域の夏祭り
- ・小中学校とのスポーツ交流のボランティア
- ・災害時のボランティア活動
- ・ホームルームでの地域清掃
- ・服のプロジェクト

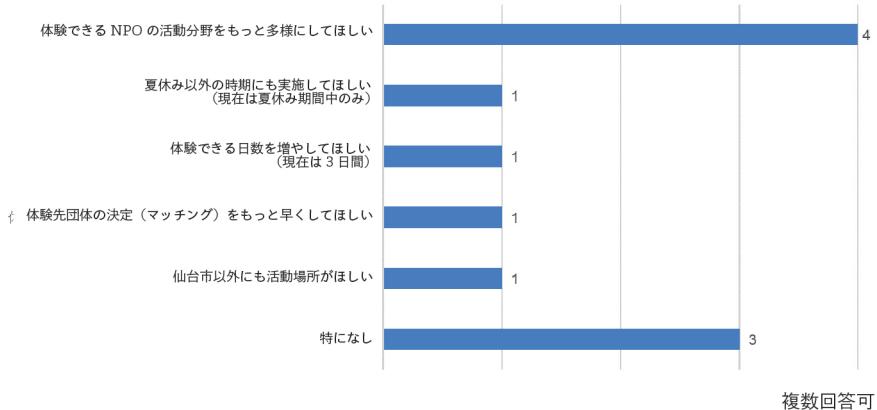
## 5. 改善点の提案

次年度以降の改善の提案としては、4校からボランティア体験ができるNPOの活動分野をもっと多様にしてほしいという声があがりました。 インタビューをさせていただいた先生からも、高校の生徒は、自分たちの街を「なんかいい」と感じており、「この街を変えていきたい」という気持ちを強く持っているため、地域の様々な施設や子どもたちとの触れ合いなどができる場が増えると良いのではないかという提案がありました。 また「自分でできることを考え、一步前に出る」ことを重視していることから、「募金活動が好きな子もいれば、直接人と触れ合うのが好きという子もいる」実態に沿う体験先の提供が望ましいという提案もありました。

夏休みの時期以外の開催も検討してほしいという意見も、1校から寄せられました。 この点についても、インタビューで話題にあがり、具体的には10月～11月ごろが良いという提案を受けました。 このころは、3年生が引退し、世代の変わり目に当たるため、高校生が進路を考える時期でもあり、興味を持ちやすいそうです。 夏のみの実施であると、高校3年生になってから何かやってみたいと思った生徒にとっては、時間的に動きにくいという点も懸念されます。

さらに、体験できる日数を増やしてほしい、体験先団体の決定（マッチング）を

もっと早くしてほしい、仙台市以外にも活動場所が欲しいという意見も、それぞれ1校からあがりました。



## V. まとめと今後への示唆

### 1. 「夏ボラ体験」は Win-Win-Win

2003 年に開始した「NPO で高校生の夏ボラ体験」は、のべ 2000 名以上の高校生に、県内でのボランティア体験の機会を提供してきました。この報告書では、過去 17 年間のプログラムが体験者にどのような影響をもたらしたのか、また生徒を受け入れる NPO、送り出す高校はどのように「夏ボラ体験」を捉えているのかを、アンケートおよびインタビューから明らかにしてきました。

そこから浮かび上るのは、「夏ボラ体験」が“win-win-win” のプログラムになっているということです。

一つ目の “win” は、ボランティア体験を行う高校生にとってのものです。いつもの高校から飛び出し、地域で活動している NPO やそのスタッフ、さらに支援を受ける人々と出会う。そうすることで、高校生活から世界が広がり、新たな視野が広がっていました。調査の中には、「夏ボラ体験」が進学する際の面接で話すネタになるなど、実用的なメリットがあったことを報告してくれる体験者もいましたが、そこでとどまる人は確認されず、進学や就職など、さらに自分の道を進んだその先に影響する考え方や生き方のヒントを、「夏ボラ体験」から得ていました。高校時代に自分が社会に貢献できる存在であることを肌で感じることは、長期的なインパクトをもたらすと考えられます。

二つ目の “win” は、ボランティア体験を行う高校生を受け入れる NPO にとってのものです。「夏ボラ体験」は、NPO が高校生と「出会う場」となっていました。通常の NPO の活動では、なかなかつながりを持つ機会のない高校生に、目の前で活動を見て、知ってもらえる大きなチャンスと捉えられていたのです。さらに、活動にフレッシュな刺激を得る機会ともなっていました。調査の中では、高校生とスタッフが個人的なことも話せる間柄となり、「夏ボラ体験」後にも、再度ボランティア活動を行ったり、おしゃべりに高校生が NPO に立ち寄った事例なども確認されました。たまたま参加したイベントの会場が受け入れ NPO で、「夏ボラ体験」から何年も経っていたのに、スタッフの人が覚えていてくれてうれしかった、という例もありました。たった 3 日間のボランティア体験ですが、受け入れ NPO が、作業を行うボランティアという視点を超えて、高校生とのつながりを築いてくださっています。

三つ目の “win” は、高校生をボランティア体験に送り出す高校にとってのもので

す。高校の外とのつながりや、高校の外での経験を積む機会を、先生方も模索されていました。「夏ボラ体験」は、その機会の一つとなっているようです。そこから高校生が地域とのつながりを持ち、地域の課題や行われている支援の実態を知り、主体性や積極性を育んでいる「夏ボラ体験」は、高校での教育と連続性のあるプログラムとして捉えられます。

今回の調査では、NPOによる支援を受け、高校生ボランティアと触れ合った方々の声を聞くことは叶いませんでした。子ども支援を行う受け入れNPOの一つからは、高校生ボランティアが来ると「子どもたちが喜ぶ」という声が寄せられています。「NPOで高校生の夏ボラ体験」は、“win-win-win”どころか、“win-win-win-win”なプログラムになっているのかもしれません。

## 2. 改善点と新型コロナウイルス感染症への対応

一方、今回の調査からは、今後の改善点として様々な提案もなされました。体験者からは、ボランティアなどにあまり興味がない高校生にアプローチすることの重要性が指摘され、SNSを通じた情報発信や、高校の先生に「関心のありそうな生徒」に声を掛けてもらうといった具体的な対策も浮かび上がりました。受け入れNPOからは、当日キャンセルを防ぐこと、またある程度のモチベーションを持って高校生をボランティア体験に送り込むことの重要性が指摘されました。体験者からの提案を掛け合わせて考えると、ボランティア体験時に、NPO側が準備した作業だけでなく、高校生からも何らかの企画の提案などをしてもらうことも、モチベーションアップにつながるかもしれないというヒントが得られました。高校の先生からは、高校生が部活などの課外活動とより折り合いをつけやすい形式での実施や時期の再検討、ボランティア体験を行うNPOの活動分野の多様化が提案されました。これらの点は、一つ一つ検討し、次年度以降の企画・運営に、反映して参ります。

次年度以降、どうしても避けて通れない課題の一つに、新型コロナウイルス感染症の対策があります。今回の調査では、特にNPOと高校の皆さんに、具体的にご意見を伺いました。

アンケートへの回答があった受け入れNPO、8団体のうち、3団体は「現時点では分からぬ」、3団体は「マスク・手指消毒・体温確認等、万全の感染対策が可能であれば、受け入れる見込み」、1団体は「受け入れしない見込み」という回答でした。その姿勢は、支援対象者によっても左右されています。感染リスクが高い層や、感染者が出ても直ちに把握が難しい層を支援対象としている団体は、消極的な立場を取っています。中には、高校生のみならず、すべてのボランティアの活

動を取り消し、スタッフのみで活動している団体もありました。

高校の調査でも、コロナ禍での「夏ボラ体験」実施には、慎重な意見が多く聞かれました。「この状況で、学外ボランティアの募集や依頼が激減。校外に目をむけさせる機会をいかにつくるかが課題」という問題意識は共有されているものの、アンケートへの回答があった高校8校のうち、6校は「現時点では分からない」、1校は「マスク・手指消毒・体温確認等、体験先NPOの感染対策が万全であれば、高校生を送り出せる」、1校は「オンラインの作業など、人との接触が少ない作業に限定すれば、高校生を送り出せる、あるいは高校生の送り出しは、見送る可能性が高い」という回答でした。中には、「コロナ禍の中ではそもそも難しいのではないか」「学校のみの判断はなかなか難しい」という厳しい意見も寄せられました。制限された状況でも、できることをやっていくという姿勢は、多くの受け入れNPOや高校の回答に見られました。

「3密を避け、外での活動を中心に対応していきたいと考えています。」

「受け入れ側と直接連絡を取りながら、可能な活動を整理して生徒に提供できるようになれば良いかと。」

「実際の体験が無理な場合は、オンラインボランティア講座のような形態でも仕方ないかな、と思います。」

「コロナの影響で活動が困難になった団体もあれば、変わらず続けている団体、新たに始まった団体など様々ではないかと思います。行政だけでは解決できない地域社会の新しい課題も生まれたのではないかと考えます。経済や仕事も回らなくなり個人も企業も寄付金は後回しになって当然の情勢です。直接的なボランティア体験ではない参加の仕方、団体のサポートや社会への貢献の仕方があるといいですね。」

「『やむなし』というスタンスで、感染のリスクを承知で運営するしかないのではないか。もちろん、家庭にも、保護者には、説明責任はある。高校生の「やりたい気持ち」が大切なではないか。」

認定NPO法人杜の伝言板ゆるるでは、こうしたご意見を踏まえつつ、最新の感染状況を注視しながら、次年度以降の実施形態を検討していく所存です。

「コロナ禍で、ボランティアができなくてうずうずしている子が多い。」

「前向きにとらえている生徒が多く、コロナ禍ですがこれからも継続していただ

きたいと思います。」

こうした声に応えられる、ニューノーマルな「夏ボラ体験」を模索して参ります。

■この調査の実施にあたり、多くの団体様よりご協力、ご支援をいただきました。皆様に心より感謝申し上げます。

共 催：かほく「108」クラブ

地域貢献を目的に2005年12月に設立。河北新報グループに働く従業員と、その活動を応援するグループ企業12社で構成し、それぞれが寄付を出し合って運営している任意団体です。クラブの名称は、河北新報が創刊108周年を迎えた年に発足したことから名付けられました。

支 援：真如苑

開祖伊藤真乗が1936年に東京都立川市に開いた仏教教団です。国内外を問わず、地域、他団体とのつながりを大切にし、福祉、環境、教育、文化芸術や災害支援(SeRV)などの分野での社会貢献活動に取り組み、2015年よりみやぎの居場所づくり助成を実施しています。

共同実施：にじいろクレヨン

東日本大震災をきっかけに石巻市を中心に活動するNPO法人です。被災した子どもたちのための遊びを通した心のケアと、子どもたちが遊べる場、居場所づくり、そして子どもたちに寄り添った遊びと見守り活動を行っています。(2014年より夏ボラ受入団体として参加、2019年より本事業実行委員会の石巻事務局としてマッチング等を担当。)

主 催：認定NPO法人杜の伝言板ゆるる

NPOやボランティアとして活動している人また活動したいと考えている人がより参加しやすい環境づくりを進めるために市民活動の情報を収集し、発信しています。また、市民活動を支援する施設「みやぎNPOプラザ」や情報サイト「みやぎNPO情報ネット」の管理運営を宮城県の指定管理事業として行っています。

# NPOで高校生の夏ボラ体験 2020

## 過去17年間のふりかえり調査報告書

発行日：2021年3月31日

発行：認定特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる

編集：認定特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる

〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡 3-11-6 コーポラス島田B6

TEL: 022-791-9323 FAX: 022-791-9327

E-mail: [npo@yururu.com](mailto:npo@yururu.com)

URL: <https://www.yururu.com/>

